

# 純情リターンマッチ

*R i n o & K e i s u k e*

---

里崎 雅

*Miyabi Satozaki*

termity



エタニティ文庫

## 目次

純情リターンマッチ

5

欲情リターンマッチ

241

書き下ろし番外編 リターンホーム！

337

純情リターンマッチ

## 1

パソコンのモニターを見つめながら、前島理乃まえじまりのはパチパチと二、三度まばたきを繰り返した。

最近なんだか疲れ目がひどいのは、やっぱり年のせいだろうか。三十路みそじを間近に控えた二十八歳。業界の中でも比較的若い社員が多いと言われているこの「こみやま証券」だと、もう決してその若い部類には入れない。

視力は悪くないけれど、ブルーライトをカットするパソコン用メガネをかけた方がいいかもと、ふと思う。

「前島さん！ 会議室の予約取れてる？」

目頭を指で押さえてうーんと唸うなっている、背後からいきなり声をかけられた。愛想笑いを貼り付けて椅子ごと振り返ると、肩まで伸ばした理乃の栗色の髪がふわりと揺れる。

「はい、大丈夫です。伺っていた通り、十四時から第二会議室を押さえてありますが」

「え、十五時からって俺言ったよね？」

声をかけてきたスーツ姿の彼は、わざとらしい困り顔で理乃を見下ろした。その表情は、自分のミスだとわかっていながらそれを通そうとしている顔だ。

——またかよ。

内心毒づきながらも、理乃は急いでモニターへと向き直り、会議室の使用状況確認画面にアクセスする。

「わかりました。使用時間は一時間で大丈夫でしょうか？ 次の予定が入ってなかったの、時間延長の申請をおきます」

「うん。それで頼むよ。次はちゃんと俺に確認してね」

「はい、わかりました。すみません」

申し訳なさそうに軽く頭を下げてみせると、男性社員は満足気に微笑み、いそいそと自分のデスクへと戻っていった。

（お前が言ったんだよ！ 十四時だって！）

海外の顧客を相手にすることも多いこの課では、通例として二十四時間表記で時間を言い合う。

十四時。確かに彼は一週間前にそう言った。

チツと舌打ちしたいのを堪こらえて、理乃はデスクに置きっぱなしにしていた冷えたコー

ヒーに手を伸ばす。納得はいかないが、こういうことはよくある。声高に相手の非を追及するより、こうやって自分の苛立ちをやり過ごす方がずっとかしい。

それは長年派遣社員のポジションにいた理乃が身につけた、最低限の処世術でもある。北海道の地方出身で専門学校しか卒業してない自分が、東京のこんな大手証券会社で正社員として働いているなんて夢のような話だと思う。実際、地元の友達に話すと、皆が目を丸くする。

「理乃、こみやま証券で働いてるの？ 派遣とかバイトとかじゃなくて？」  
「うん。ヒラだけど、一応正社員だよ」

一様に皆、すごいと感嘆の声を上げる。でも実際は、全然すぐくもなんともない。大卒組でスペシャリストの社員と違って、こっちはいたってノーマルな事務仕事をしてるにすぎないのだから。

理乃の仕事は、こみやま証券の中でも花形営業部署といえるエクイティ・キャピタル・マーケット、通称ECM第一課の渉外員たちのアシスタント業務だ。届いた郵便物の仕分けからメールの内容チェック、出張の手配や精算など、雑用ばかりで専門的な仕事はほとんどない。ただ、アシスタント一人につき担当する社員は十人以上になるので、仕事は山ほどある。

とはいえ、雑用ばかりでも正社員であることに変わりではなく、数学も苦手な英会話だった。とはいえ、雑用ばかりでも正社員であることに変わりはなく、数学も苦手な英会話だった。てろくにできない理乃がこみやま証券に入社できたのは、ただのラッキーだった。

（あの時の金融ショックがなければ、派遣社員のままだっただろうし。今頃どこで働いてるかもわからないんだから、雑用ばかりでも感謝しないとね……）

数年前にこの業界、いや社会全体が歴史的な金融ショックに襲われた。世の中は投資に対して慎重かつ臆病になり、会社の業績はガタ落ちだった。その時たまたまこの会社に派遣されていた理乃は、他の派遣社員とともに次の契約更新はないだろうとささやきあつたものだ。

会社は大幅な立て直しを行うと発表し、早期退職者を募った。それも一段落して次はいよいよ派遣切りだと思われたころ、会社側から告げられたのは意外な提案だった。

派遣会社を通して雇用していると、派遣会社への支払い分が上乘せになる。それならやる気と未来のある若い人材を育てるために、直接正社員として雇用する道筋を作るというものだった。数ヶ月単位で契約を結ぶ派遣社員と正社員とでは、待遇も扱いもまったく違う。二つ返事でその話に乗った理乃は、晴れて一流証券会社「こみやま証券」のOLとなったのだ。

椅子に座ったままぐるりと周りを見渡し、理乃は小さく息を吐く。

（アシスタントはともかく……渉外員のエリートたちは、道産子の私でも知ってるような有名大学の卒業生ばかりだもんね。信じられないようないい環境にいるわ）

これで社内には彼氏でもできたら、人生万々歳なのだけだ。

「前島さん」

今度は別の社員に声をかけられ、理乃はびくっと眉を上げた。

「坂下さん」

自分の中ではとびつきりの、それでいてわざとらしくない程度の笑顔で振り向く。

「ごめんね、このデータなんだけど……明日までに打ち込んで、先方に渡せるように製本しておいてもらえないかな？」

「え、明日までって……この量を、ですか？」

渡された資料を見て、一瞬怯む。

「うん。急に必要になって。だけど、どうしても自分でやるだけの時間がないんだ」

確かに、こういった雑用はアシスタントの仕事ではある。とはいえ、この量を明日までと言われたらさすがに戸惑う。他のアシスタントに手伝わってもらおうかなとも思ったが、突然の残業に巻き込むのは気がひけた。

一瞬考え込んだ後、理乃は覚悟を決め坂下を見上げて微笑んだ。

「わかりました。なんとかします」

「本当!? 助かるなあ! 僕はこれからちよつと外に出て、何時に帰れるかわからないんだけど……よろしくね」

坂下は理乃のデスクに腕をつき、身体をかがめて近付いた。

「この埋め合わせ、今度必ずするね。じゃあ」

理乃の耳元でそうささやき、坂下はいそいそと自分のデスクへと戻っていった。

「あー、理乃残業決定。またいいように使われたの？」

坂下がいなくなると、すかさずうしろの席の同僚が理乃の方へとスチール椅子を転がしてきた。理乃と同じく派遣上がりで社員になり、アシスタント業務についている涼子だ。「派遣上がりだからって舐められてるんじゃないの? いくらアシスタントって言ったって、限度があるじゃん。もう立場的には同じ社員なんだから、そんな急な仕事断れ方がいいのに」

「んー、まあ仕方ないよ。今日は別になんの予定もないしき。残業手当もつくし!」  
へへっと笑ってみせる。

(坂下さんから頼まれた仕事だし、ね)

他の誰にも話したことはないけれど、理乃の中で坂下はほんの少し特別な存在だった。一度だけのつもりで坂下から無理な残業を引き受けたら、いつの間にかそれが当たり前になり他の担当社員よりも少しだけ強引に仕事を押し込んでくるようになった。しかしその代わりに彼は、『埋め合わせ』と称して理乃を食事に連れていってくれるのだ。

付き合っているなんて、思ってもいない。それでも、社内では有望株として上司にも

注目されている坂下から、二人っきりの食事に誘われることは理乃に大きな優越感を与えてくれていた。

もしかして残業が必要な仕事を理乃に度々頼んでくるのは、二人で食事に行くためのきっかけ作りかもしれない。

そう思えば、急なお願いだってまったく苦にはならなかった。

「うげ、すごい量……大丈夫？ それを打ち込みだけじゃなく製本まで？ 手伝おうか？」

「ううん！ 大丈夫だよ。さ、ちゃっちゃと仕事しよー」

残業は確定したが、理乃は鼻歌でも歌い出しそうな勢いでパソコンの前に座り直した。

翌日。

理乃は欠伸<sup>あくび</sup>を噛み殺しながら、ビルのセキュリティゲートに社員証をあてて通り過ぎた。

鞆の中には、栄養ドリンクが入っている。

（さすがに昨日は疲れたな……）

さっさと終えられると思った入力作業に案内手こずり、会社を出たのは終電ギリギリの時間だった。おかげで今朝の化粧ノリはイマイチだ。多少の不摂生はものもしなかった。

た若い頃と違って、最近は生活の乱れがすぐ肌に出る。これが二十八歳の現実か。

ふあ、と再び欠伸が込み上げてくる。口元を手で隠しながらフロアに足を踏み入れた理乃は、なんだかいつもと少し様子が違うことに気づいた。上司の机の周りに皆が集まっています、どこか華やいだ雰囲気だ。よくよく見ていると、その輪の中心に坂下がいる。

（あれ、坂下さんどうしたんだろう……）

しきりに照れた様子の彼の隣に、一人の女性社員が寄り添うように立っている。一瞬脳裏をかすめたのは人事異動だったが、こんな中途半端な時期にそれはありえないと思いき直す。

「どうしたの？ 坂下さん何かあったの？」

デスクに荷物を置いてから、集まっていたアシスタントの女子社員たちに声をかける。「あー、理乃。あんた坂下さんのアシスタントだよな？ わりと仲良さげに見えたけど、知ってたの？」

「何が？」

「結婚するんだってー、坂下さん。秘書室の真田さんと」

「え」

言葉を失った。

「秘書室の真田さんってさー、確かウチのお偉いさんの親戚かなんかじゃなかったっ

け？」

「そうそう。んで、小学校から大学まで女子校かつエスカレーター式のお嬢様学校出身！」  
「うえ、小学校から女子だけなんて世界があるのー？」

ケラケラと騒ぐ同僚たちを尻目に、理乃は上司と談笑をしている坂下に目が釘付けだった。

坂下は理乃が出勤してきたのに気づく様子もなく、穏やかに微笑んでいる。隣に佇んでいる秘書室の真田は、お嬢様女子大出身の美女として社内でも有名な人だ。受付に配属が決まっていたところを、上層部の口利きにより花形の秘書室になったという噂も聞いたことがある。

「あー、なんだか残念。やっぱ坂下さんくらいの有望株は、結局奥さんになる人もああいうレベルの高い女性なんだねー」

「そりゃあそうだって。なんだかんだいって、ここの課の人は皆そうじゃん？」

第一課のメンツは皆、揃いも揃って結婚するのが早い。それがまるで出世の条件でもいうように、家柄や学歴（ぞろ）が優秀な女性社員や、はたまたお見合いなどで知り合った良家の女性とさっさと結婚を決めてしまう。

「独身族の最後の砦だったのにね、坂下さん。とはいってもなにも期待なんてしてなかったけどさー。でも理乃とはちょっといい感じに見えてたし、これはもしかしてもしかす

ると……なんて思ってたのになあ」

同僚の手が、ぼんと理乃の肩にのる。それがひどく重く思えたけれど、理乃はなんとか引き攣（つ）った笑みを浮かべた。

「社内で相手探すのなんか諦めて、今度合コンでもしよっかあ」

「なになに、あんたここのエリートたち狙ってたのー？ 甘い甘い」

あつけらかんとした笑い声が響く中で始業のベルが鳴り、皆はぞろぞろと自分の席に戻っていった。その波に乗って、理乃もノロノロと椅子に座る。上司に報告が終わったのか、坂下と真田は並んで頭を下げると理乃のうしろを通過ってフロアを出ていった。一瞬理乃の背中に緊張が走ったけれど、坂下は悲しいくらい平然としていた。

数回二人きりで食事に行っただけで、付き合ってるなんて過信したことはなかったけれど。

坂下が連れていってくれたのは今まで理乃が一度も行ったことがないような、そして一人では到底行けないハイクラスな店ばかりだった。ちゃんと付き合ってきた彼氏にさえそんなところに連れていってもらったことがなかったから、正直舞い上がった。

（あれって全部……私をいのように使うため、だけだったのかな……）

昨日坂下は、得意先から直接帰宅するとホワイトボードに書いてあった。アシスタント業務についている女子社員は大抵定時で上がれるが、世界中を相手にしている渉外員（しやうがい）



はそうもいかず、課のフロアには四六時中誰かがいる。坂下が予定外とはいえ夜遅くに顔を出したとしても、何も不自然じゃない。

もしかして、遅くまで残業している自分を気遣い様子を見にきてくれるかも——なんて思っただけのフロアの入り口をチラチラと気にしていたのが、滑稽で仕方ない。

「理乃？ どうしたの？」

椅子に座って黙ったままの理乃に、うしろの涼子が訝しげに振り向き声をかけた。

「あ、ううん。なんでもない」

慌てて笑みを浮かべ荷物を片付け、パソコンのモニターのスイッチを入れる。けれど、手も頭も凍ったようにしばらく動かなかった。

「あー！ 理乃やっときたー」

メールで指定された居酒屋の引き戸を恐る恐る開けると、店の奥からは懐かしい声が聞こえてきた。

「うわっ、ホント理乃だー」

「久しぶりい。あんたいつ誘っても来ないんだもん。付き合い悪い！」

坂下の結婚を知ってから数日後。理乃の携帯に、高校時代の友人から飲み会のお誘いメールが届いた。

北海道から上京してきた同級生たちで、年に何度か飲み会を開いているのは知っていた。しかし今まではあまり参加する気もおきず、なんだかんだと理由をつけ断ってばかりだったのだ。

今回も、坂下のことがなければ参加していなかっただろう。あれ以来、どうしても一人でいると気持ち沈んでしまって、何か些細なことでもいいから気分転換がしたかった。

「ごめん。なんだか忙しくて」

温かく迎えてもらったこととどこか罪悪感を覚えつつ、理乃は座敷に上がろうとブーツを脱いだ。

「仕方ないよー。理乃、あのこみやま証券のOLなんだもん。すっごいよねー」

屈託なく微笑まれ、またズキリと胸が痛む。

「すっごくないよ別に……。たまたま派遣上がりでタイミングよく採用してもらえただけでさ。運がよかっただけだもん。全然すっごくないんだ、実際」

いつもなら肯定も否定もせずに愛想笑いを浮かべる場面だけれど、弱音が素直に出てくる。それは、相手が昔から知っている同級生だからだろうか。

「なんか疲れてる？ 仕事帰りなんでしょ。まあ上がらなうか」

「うん」

促されるままに、個室の小上がりへと足を踏み入れた。

「よっ、おせえぞ前島！」

理乃が参加するのは初めてだが、飲み会の画像はたまにメールで送られてきていた。集まっているのは、きつといつものメンバー……そう思っただけで席を見渡した理乃は、ある人を見つけて視線が釘付けになった。

「え……!?!」

「おう」

ビールの入ったジョッキを口にあてたまま、目だけをちらりと上げてこちらを見た彼。懐かしい、やや細くて涼しげな目元に、一気に心臓がドクンと跳ね上がった。

真っ黒でやや長めの前髪が額にかかっている、そのせいかあの頃の彼よりずっと大人に見える。落ち着けと言いつつも、鼓動は速まるばかりだ。

「恵介……。どうしたの、一体。いつこっちに来たの？」

高校時代一番仲の良かった男友達の柘恵介が、そこにいた。高校時代どころか、卒業した後も彼以上の友達ができたことはない。今でも彼を友達と言いつつ切れるかどうかは、微妙に怪しいけれど。

「なんだよ恵介、理乃に何も言っていなかったのか？」

傍にいた同級生の言葉に、理乃は驚いた。

「え、皆は恵介がこっちに来てること、知ってたの？」

「知ってるも何も……今日は恵介の上京祝いだぞ。あれ、前島は知らないで今日来たの？」

「あ、ごめん。メールに書いてなかったっけか」

理乃に今日の集まりをメールで知らせてくれた友人が、ぺろりと舌を出した。

「だって理乃、知ってると思っただもん。恵介が直接教えてるだろうなって。あんたら、高校時代は超仲良かったじゃん」

微妙な質問に、ぎくりと身体がこわばる。なんて答えようかと躊躇ちゅうずしている理乃をよそに、恵介はしれつと言いつつ放った。

「高校時代の友達なんて、そんなもんだろ。しかも専門学校からこっちに出てきた理乃と地元に残った俺じゃ、生活環境が全然違うし交流もなかったよ」

慌てて、理乃もその話題に乗っかる。

「そ、そうそう。別に何かあったわけじゃないんだけど……なんとなくね。ほら、新しい生活に慣れるのに精一杯だったし……」

『何かあったわけじゃない』のくだりで、恵介の眉がぴくりと動いたのがわかった。けれど、こんな大勢がいる場所で、へたな反応は見せられない。

「冷たいなー、理乃。あ、でも私もこの定例会で再会するまで皆に連絡取ってなかったかも」

「でしょでしょ？ そんなもんだってば」  
 いい具合に自分達二人の話題が流れていきそうで、理乃はほっとして、ひとまず空いている席に腰を下ろした。その途端――  
 「前島、おめーはイトコで働いてるからってよ、俺ら同胞のことなんてもうすっかり忘れてるんだろ！」

「わっ！」  
 すでにアルコールが回っているのか、隣の男がいきなり理乃の肩を抱いてきた。吐く息はかなりアルコール臭くて、目もすわっている。

確か、高校時代はほとんど絡むことのなかった同級生だ。驚いて必死に身体を離す。

「ちよつとちよつと、近いってば……」

「あーん？ こんなOLなら慣れっこだろ？」

ふざけんな。プチンと切れて男の身体を押し返そうとしたら、その前にガバッと離れた。  
 「お前、何やってんだよ。飲み過ぎだ！」

三人くらい向こうにいたはずの恵介が、あつという間に隣にきてその男の腕を力強く後ろに引っ張っていた。

「っんだよ恵介！ お前の彼女でもあるまいし！」

「そういう問題じゃねえだろ！」

「もー、渡辺<sup>わたなべ</sup>飲み過ぎだつてば！ せっかく理乃が初めて参加してくれたのに、そんなんじやもう来なくなっちゃうしょっ！」

恵介の行動にハッとしたように、周りの友人たちも慌てて酔っ払った彼を理乃から遠ざけた。自然と、空席になった理乃の隣に恵介が座る形になる。

「……ひ、久しぶり」

「おう」

あの頃は、どんな風に話していたっけ？

当然ながら記憶よりもずっと大人で、心なしか筋肉もついてたくましくなった恵介を直視できない。彼が座っている左側の腕を、ビリビリに意識してしまう。

高校の時から、周囲にカッコイイと噂をされるような人だった。下級生や他校の生徒に告白されることもあったし、背が高いせいで花形のバスケット部やバレー部からしょっちゅう勧誘されていたのも知っている。そんな彼が特に目立つところのない平凡な自分と一番仲がいいのは不思議だったけれど、話しているときめちやくちやウマが合って居心地が良かった。恵介にとっても、理乃はそんな相手だったのだと思う。

大人になった恵介はあの頃よりもカッコよくて、東京に出てきてそれなりにイイ男を見慣れた理乃から見ても充分すぎるくらいに魅力的だった。

ちらりと隣を窺<sup>うかが</sup>ってみると、心なしか彼の顔が赤い。

「あれ恵介、結構飲んでるの？ 酔ってる？」

「全然酔ってねーよ。ばーか」

ふいに伸びてきた手が、理乃のおでこをピンと弾いた。

「いったっ！」

「でた！ 理乃ってよく恵介にデコピンされてたよねー」

高校時代を思い出した周りの友人達から、どっと笑い声が起こった。

「だってこいつのおでこ、デコピンしたくなるんだもん」

「わかる！ つるんとしていてゆで卵みたい！ 理乃、相変わらずお肌キレイ」

笑い声が起こったおかげで、理乃の緊張がほんの少し和らぐ。額を押さえてほっとしたのと同時に、複雑な気持ちが入み上げる。

会いたかった。でも、会いたくなかった。

「理乃、とりあえずビールでいい？」

「あ、よろしく」

「理乃がビールとか、笑えるわ」

恵介とは、高校を卒業して以来一度も会ったことがなかった。むしろ、意識して避けていたと言ってもいい。上京して、こちらでの生活に慣れるのに必死だった専門学校時代はあまり実家に帰ることもなかったし、地元での成人式にもあえて出席しなかった。

「十年ぶり、かあ……」

集まったメンバーを見渡し、そしてこっそりと隣の恵介に目をやる。どことなく不機嫌そうではあるけれど、そんなのは高校時代にもよくあった。理乃は彼がデコピンしてきた額をゴシゴシと指でこすりつつ、深呼吸をひとつした。

（恵介……あの時のこと、もう忘れているのかな）

理乃にとつてはずっと忘れられなかった思い出。でも、十年もたってしまったえば記憶も随分とあやふやになる。ずっと後悔しながら胸をきゅんと痛めてきた出来事も、こうやって時がたつと、なんでもないようなことのように思えてくる。

理乃がそうなら、恵介はとくに過去のこととして忘れているに違いない。

（そうでもなきや、こうやって普通に私の隣になんか座れないよね）

込み上げてくるのは、甘酸っぱいような苦しいような、説明しがたい感情だ。

「じゃあ〜！ 今日久しぶりの恵介と理乃の再会に！ かんば〜い！」

運ばれてきたジョッキを手に、同級生が音頭をとる。理乃は苦笑しつつも隣の恵介とカチンとジョッキを合わせた。

高校時代の友人が久々に集まったとなれば、話題はやっぱり当時のことになる。文化祭や修学旅行、はたまた誰と誰がこっそり付き合っていたなど、話題には事欠かない。

「そういや、恵介と理乃は本当に付き合ってたの？」

唐突に自分たちに話題が振られ、理乃は二杯目に差しかかったビールを盛大にブツと噴き出した。

「うっわ、汚いだろ！」

そう言いつつ、恵介は慌てておしほりを手に取り理乃の前のテーブルを拭く。

「そこは『大丈夫か？』って、そのおしほりを私に手渡すところなんじゃないの？」

「お前なんか後でもいいだろ。人様の店を汚したことが問題じゃ！」

理乃はふてくされた顔をしつつ、別のおしほりで自分の口の周りをぬぐう。

「付き合っていないよ。このやりとり見たらわかるでしょ？ 恵介は悪友だね、悪友」

「悪友ってなんだよ。俺は別に悪いことなんて何もしてねえぞ！」

今度は横から、どしんとヒジ鉄がきた。

「いたーい！ ほら見てよ。恵介に女扱いなんてされてないもん！ 暴力はんたーい！」

ケラケラと笑って見せながら、心の中ではまったく別のことを考える。

女の子扱いなら、皆の見ていないところでいつもさされていた。さり気なくだけど、はつきりと。

下校途中に街へ遊びに行こうと二人きりになった時、恵介はいつも無言で理乃を歩道側へと押しやった。掃除の時に重いバケツを運んでいると、うしろから追いかけてきて

はすぐに奪う。そんな些細な気遣いなら、拳げればキリがない。

誰もいない時に限って見せられる不器用だけど優しい態度に、どうしていいかわからずお礼もろくに言えなかったのは理乃の方だ。

そんな歯がゆい当時の記憶が蘇る。理乃はそれを振り払うかのように手を伸ばして焼き鳥を手を取った。

「でもさー、恵介もこんな年になってこっちに出てくるなんてさ。彼女とかいないの？」  
同級生の女子が焼き鳥の串をぶんぶんと振りながら恵介に問いかけた。

「いねえよ」

たった一言の返事に、随分ほっとしている自分がいる。はたとそれに気づいて、慌ててビールをあおる。

「じゃあ理乃はー？」

「え？ 私は……」

言われて、ハッと坂下が頭をよぎった。居酒屋に足を踏み入れてからはすっかり忘れていたくせに、思い出した途端にずんと気持ち沈む。わずかに陰った理乃の表情に気づき、同級生は首を傾げて顔を覗き込んできた。

「あれ。なんか、聞いたらマズかった？」

「いや……大丈夫だよ」

そうは言ったものの、続く言葉が口から出ない。どうやって取り繕えばいいかわからず、仕方なく再びジョッキに口をつけると一気に飲み干した。

「理乃、ペース早くない？ 何かあったの？」

「あー、うん。会社でイヤなことがちよつとあってね」

苦笑いを浮かべつつ、三杯目のビールを注文する。忘れようと思っていた数日前の出来事がイヤでも頭に浮かび、段々とむしゃくしゃしてきた。

(恵介に久々に会えた嬉しさで、さっきまでは忘れてたのになあ……)

坂下の結婚のことで頭がいっぱいで、それを忘れるためにほんの気まぐれで参加した飲み会だった。ここで恵介と再会できたのを、素直に喜べばいいのはまだわからない。

はふ、と小さくため息をつく様子を隣の恵介がじつと見つめていることに、理乃は気づきもしなかった。

「結局う〜……男はやっぱり、上品で育ちのいいお嬢様が好きってことなんだよねえ」

最初にペースを乱されてしまったせいなのか、その日の理乃はアルコールの回りが随分と早かった。十年ぶりの再会に緊張していたのは最初だけで、気づけば高校時代のように恵介に向かってグチグチと文句を吐き出していた。

「私にはあ、ただ自分の都合よく仕事をしてもらえるように、愛想を振りまいてただ

けなんだよね。調子に乗って浮かれて、本当ばっかみたい」

チューハイを飲み干した恵介は、理乃の話聞きながらもどこか退屈そうに氷の入ったグラスをカラカラと揺すった。

「で。結局お前は、その男を好きだったのかよ？」

「好きじゃないよ！ 別に！ ただ単に……」

「ただ、何だよ。期待して弄ばれた私がバカみたいってか」

「弄ばれてない！ 何回か二人でご飯に行っただけだっつうの」

「でも結局はそういうことだろ」

「まあ、そうだけども……」

理乃はそのまま突っ伏し、コッソリと額を冷たいテーブルにくっつけた。

今、自分が面倒くさい酔っぱらいになっているという自覚はある。同級生との久々の再会で、これはない。気づけばグダグダと管を巻く理乃の傍には恵介しかおらず、他の皆はそれぞれが小さくグループを作って別々の話題に熱中していた。

「好きなのかって言われたら、違うけどさ。でもさ、期待しちゃうじゃん。二人だけであんなイイトコ色々連れてってくれたら」

「……イイトコ？」

心なしか、恵介の声が低くなる。

「そーだよー。センチユリーなんたらかんたらのデイナーとかあー、お肉が柔らかくてめっちゃ美味しかった」

「なんだ、そっちな」

「なんだとは何よ！」

「なんでもねえよ」

伏せたままの理乃の髪を、恵介がクシャクシャとかき回す。

「……まったく、久々に会ったと思っただらそれかよ。お前のコイバナなんて聞きたくねえっつもの」

「コイバナじゃないってば！ バカにされたみたいでムカつくだけ！」

理乃はガバツと顔を上げると、底に数センチ残っていたビールを一気に飲み干し、タ  
ンツとテーブルにジョッキをたたきつけた。

「うわ、あぶねーな。もうやめとけよ」

しかめつ面をした恵介が理乃の手からジョッキを遠ざけた。さり気なく指が触れど  
きんと心臓が高鳴ったが、アルコールのせい、と火照る身体に言い聞かせる。

「……なによ。平気そうな顔しちゃってさ」

テーブルに顎を乗せると、そのままの姿勢で恵介の顔を見上げた。

「ん、なんか言ったか？」

「べつに！」

過去のことを気にして避けられたりしたら傷つくくせに、かといって平然とされてい  
るのも気に食わない。

じゃあどうしてほしいのよ、と自分でも思う。

「……こういう面倒くさい女だから、向こうにとっては論外だったんだろうな。相手が  
あんなだけ美人のお嬢様じゃ敵うわけもないし、そもそも住む世界も全然違うだろうし。  
わかってるから、別にいいんだけどね」

自嘲気味につぶやくと、テーブルに頬杖をついた恵介がちりと理乃を見下ろした。

「……その程度かよ」

「少なくとも、恵介に愚痴ってスッキリする程度！ だから……もういいの」

無理に笑みを浮かべて、恵介を見上げた。

本当は、違う。少なくとも理乃の方では、坂下に対して淡い恋心を持っていた。競争  
の激しい職場でバリバリと実績を伸ばす姿は格好よかつたし、海外の顧客との電話でネ  
イティブさながらの英会話をする姿にも憧れた。

そんな彼が自分だけを食事に誘ってくれるのは純粹に嬉しかったし、付き合えるかも  
しれないと感じたこともあった。

「でもお前が誤解するくらいいの、思わせぶりの態度はされてたんだろ？ なのに何も知

らされずにいきなり結婚って、何遊ばれてんだよ」

いきなり核心をグサリとつかれた。二股——と言っているのかはわからないけれど、理乃に気のある態度を取りながら他の女性と結婚を考えるくらい親交を深めていたというのに一番傷ついた。

所詮自分は、セカンドということか。

飲み過ぎたアルコールが仇になって、じわりと涙が浮かぶ。ごまかさなきゃとジョッキに手を伸ばすが、一瞬早く恵介がジョッキを持ち上げてしまったためスカツと空を切る。

「理乃……もう飲み過ぎだつて。久々の再会で、そりやないだろ？」

恵介の声色が優しく、不意打ちできゅんと胸が鳴った。

（あの時にもっと勇氣を出してたら……恵介との関係は、何か変わってたのかな）

「……久々の再会だから、いいんじゃない」

恨めしげに上目遣いで口を尖らすと、また額をびんつと軽く弾かれた。

「結婚がそんなにうらやましいか？ お前も人並みに結婚なんてしたいと思ってるんだな」

「……そりや、憧れくらい持つてるよ」

「なになに、前島結婚したいの？」

結婚、という単語に反応したのか、周りの友人たちが理乃と恵介の話題に入ってきた。これ以上二人で話していると、泣いてしまいたいそうだったのでちょうどいい。

今までの話を知らない同級生たちは、呑気に結婚の話題で盛り上がり始めた。  
「でもまだ俺らの年じゃ、結婚を焦ったりしねえよなあ」

「男はそれでいいだろうけどさー。女は違うでしょ。若ければ若いほどよく売れるもん」  
「売れるって……そんな身も蓋もねえ言い方すんなよ」

すかさず恵介が突っ込みを入れたが、女性陣はウンウンと一様にうなずく。

「男はさー、三十過ぎてからもバリバリだし、むしろ三十過ぎてからの方が落ち着いてくるからいいんだろうけど」

「そそ、自分が年取ってても若い子捕まえればいいだけだしね」

「女は大人の魅力でなんとかしたくてもさー、春になってピチピチの新人社員が入ってくるのを目の当たりにすると、年には勝てないなあって実感しちゃう」

「ああわかるー!!」

思わず身を起こして、理乃も賛同する。そんな女同士の会話に、恵介は若干引いたようだ。

「そんなもんかねえ」

恵介は興味なさげに枝豆に手を伸ばすと、ぶつりと口の中へと豆を放り込む。



「若いっただけで有利なわけねえだろ。少なくとも俺にとっては関係ないけど」

「恵介……十年ぶりに再会したら、アンタなんか成長した？」

大げさに驚いてみせながら恵介の肩に手を乗せると、意外にも彼の身体がびくりと反応した。

(あ、れ?)

その反応が恥ずかしくて、慌てて手を引つ込めてしまう。少なくとも十年前の彼は、これぐらいのスキンシップにはまったく動じなかったはずだ。

「成長なんて……してねえよ。お前と違って、な」

わずかに嫌味を含んだ声色に、理乃はどうしていいかわからなくなった。

「でももうさー！ 理乃の会社なら、将来の有望株がよりどりみどりなんじゃない？ 今日

日の飲み会メンバーの中で玉の輿に乗れそうなのって、理乃しかないよね」

反対隣にいた友人が、大げさに理乃の脇を小突いた。

「有望株って……」

蒸し返されたくない話題に、うんざりと肩を落とす。

「だってさ！ あの超一流のこみやま証券だよー？ まあよくあんなところに就職できたもんだよ」

「それは、自分でも驚いているけどさ」

「どうどう？ やっぱり同僚は皆高学歴？」

「あー、うんまあ……東大とか早稲田とか慶応とか、そういう超有名どころの大学なんて、普通だと名前しか知らない関わりのない存在じゃん？ でも、同僚の人は皆そういうところ出身なんだよね」

「ひえー！ すごっ！むしろ気後れしてやりにくそうな感じするけど」

「学歴の高さと仕事のできるできないは比例しないと思うけど、女子社員はともかく男子は高学歴の人しかないかも」

証券会社の花形、営業部のしかも一課にいるせいもあると思うけれど、実際理乃の周りの男子社員たちはこっちが恐れおののく学歴の人ばかりだ。仕事上ではそんなこと関係ないし、気にならない素振りをしているけれど……専門学校卒の派遣上がり、ということを気にしていないといえばウソになる。

そしてそういう高学歴な彼らは、さっさと自分に釣り合う女性を見つけて早々に結婚を決めてしまうのだ。

社会的地位も高く待遇もいい今の会社を辞める気はさらさらない。とはいえ、今回のことはかなりダメージが大きかった。

坂下と結婚したかったのかと問われれば、そこまではまったく考えていなかった。けれど「結婚相手」という土俵にすら上がらせてもらえなかったことで、理乃のなげなし

のプライドはひどく傷ついた。

「あー、結婚したい」

思わず、ぼつりとつぶやいていた。

「何？　結婚したいんだ、理乃」

「え？　なんか可笑しい？」

女友達からかわれ、ムツと反応してしまう。

「いや、そういうタイプには見えなかったからさあ。こっちに出てきて、バリバリ仕事に生きてるんだと思ってた。だから、意外っていえば意外」

「そんなことはない。したいよ、結婚。もう誰でもいいからもらって、とか思うこともあるもん」  
誰でもない言い過ぎだけれど、誰かに深く理解されたいという気持ちはいつもあった。たった一人でもいいから自分を心底愛して支えてくれたら、もっと楽に生きていける気がするのに。

さらに、さつさと結婚して自分を見下していた坂下を見返してやりたいという浅はかな打算も、少なからずある。

「はー……結婚、したいな」

しみじみとつぶやき、気を取り直して何か追加注文しようとメニューを手に取った時だった。

「じゃあさー理乃、恵介と結婚しちゃえばいいんじゃないかね？」

斜め向かいに座っていた男友達が、若干口の端を釣り上げながらニヤニヤと言いつつ放った。

「……はっ？」

突拍子もない提案に、眉間にシワを寄せて聞き返す。

「だって、誰でもいいんだろ？　だったら恵介とかいいんじゃないかね？　お前ら、ずっと仲良かったよなあ」

「な、仲良かったら結婚するとかそれおかしいでしょ！」

思わず声を張り上げる。

「あー、でもそれ、結構妙案かもよ？」

「ちよつ……亜希子まで？」

酔っぱらいの戯言か、そのふざけた話に女友達たちまでもが乗り始めた。

「同級生カップルができたなら、楽しそう。結婚した後とか、二人の家が皆の溜まり場になつたりとかしてさ！」

「お、それもいいな！」

肝心の二人をよそに、周りは一気に盛り上がった。

「理乃と恵介なら、絶対に合うと思うよ。高校時代だってあんなに仲良かったじゃん。

ねえねえ、あんたら本当に付き合ってたの？」

「だから付き合っていないってば！」

理乃だけが、顔を引き攣らせながら必死に抵抗している。恵介は何も思わないのか、しれっとした様子で淡々とチューハイを飲み続けている。そのクールな横顔を見つめていたら、虚しさが込み上げてきた。

（訂正するまでもないってことか。そうだよ。私のことなんかなんとも思っていない……一晩一緒にいたのに、何もなかったくらいだもんね……）

忘れていたはずの古傷が、ズキリと痛む。

理乃はハーツと深いため息をつくとき、メニュー表を開いた。

「なんかアホらしくなってきたわ。すみませーん。あ、たこワサと月見つくね。あと生ひとつー」

伝票を手にやって来た店員に、淡々と注文を告げる。

「まだ飲むのかよ？」

「別にいいじゃん。ほっといてよ」

「拗ねなんて」

ふいに伸びてきた手が、くしゃりと理乃の髪をかき回した。高校時代によくされてきた仕草が、今の理乃には刺激が強い。払いのけようとしても、身体が動かない。

「……まあでも、理乃と結婚するのって、案外いいかもな」

「はっ？」

理乃の頭に手を乗せたまま恵介が言った。啞然として恵介を凝視する。

「何言ってるの恵介。さっきの私の話、ちゃんと聞いてた？　そういう風にかかわれるの、私すごくイヤなんだけど」

「別にかかわってるわけじゃねえよ」

恵介までもが、こんなふざけた話に乗っからないでほしい。昔の感情が、蘇りそうになる。

上辺だけでも、なんてことないって顔で取り繕わなきゃ——

理乃が必死になって作った顔は、ひどくふてくされたものだっただろう。

「何だよその顔。お前、誰でもいいって言ったじゃん。俺もそんな感じ」

「そりゃ……言っただけさ。でも、はみっていかなくていいか、その……」

本当は、誰でもいいなんて思っていない。だからこそ、恵介が『誰でもいいから結婚したい』だなんて思って理乃に言っているのなら、かなりシヨックだ。

「俺も、恋愛とかめんどくせーし。もうそーいうのいいんだけど、このままってのもちょっとな。なんだかんだ言っただけで、独身男に世間の風は冷たいし」

「二十代で恋愛が面倒くさいって……アンタ今までどんな恋愛してきたわけ？」

理乃だって、決していられる恋愛遍歴を持っているわけではない。なのに、つい上から目線でそう言ってしまう。

「面倒くさいのに世間体を保つために結婚したいなんて、まさか恵介……実はゲイとか!？」

話題を逸らすためにわざとウケを狙って言ったつもりが、恵介は顔色を変えずに理乃を見つめ返した。

「それだけはない……と思うけど、いや、わからん」

「わ、わからんってどういうことよ!？」

「バイかもしれないって思ったことはあるから。それこそ高校の時かなあ」

「え、マジ!？」

思わず恵介の方へと身を乗り出す。

「なんでなんで! 誰相手に? 教えて!」

「ホラ、バスケット部に黒木くろぎっていたじゃん。アイツだけは、なんつうかいい匂いがするっていうか……傍にいと、こうクラツときたことが何回か」

「あああああ! わかるわかるう〜! 黒木くんなら許す! アンタいい趣味してるじゃん!」

どん引きする周囲の友人たちをよそに、理乃は恵介の右腕をバシバシと叩いた。

「私としてはそれ、高校の時に教えてほしかつたなあ。そしたらアンタを見る目もちよつと変わったかもしれないのに」

「なんだよお前、もしかして腐女子か?」

「違うけど! でも黒木くんとなら許す!」

「アンタたち……マジで、何わけのわかんない話で盛り上がってるの?」

「ホラ、やっぱり相性いいじゃん」

呆れたように周りに笑う声が湧きおこる。理乃の前には先ほど注文した生ビールとつまみが並んだ。

「そりゃあ、まあ……ね。うん」

その後に、なんて言葉を続ければいいのかわからなくなった。

——そりゃあ、恵介は特別だから。

そんなことを言ってしまったら、皆の思うツボだ。

(そもそも、恵介はどうして今頃になって上京してきたんだろ)

彼の実家は農家のはずで、卒業後はひとまず家業を手伝うと聞いていた。成績のいい恵介が進学しなかったことに、教師たちもがっかりしていたのを思い出す。

東京では初春でも、北国の地元はまだまだ雪が残っていて農作業はできない。だから農家にとって暇な時期には違いないけれど、ただの観光に来たというムードでもな

かった。

「ねえ恵介。そもそもなんで東京に来たの？」

周りに聞かれないうちにコソツと耳打ちしてみると、恵介は不機嫌そうに片眉を上げてみせた。

「何って……仕事……みたいなもんっていうか」

「え？ 実家の？ なんか会合でもあるわけ？」

「会合ってお前、何言ってる」

「もしかして、実家の農家を手伝うのをやめてこつちで働く……とか？ あ、出稼ぎ？」

恵介は、益々怪訝そうに眉をひそめた。

「なんだ、お前知らないのか」

「は？ 知らないのかって……何を？」

話がまったく見えずに首をひねる。すると恵介は驚いた顔をしつつも、ひらひらと顔の前で手を振った。

「いや、知らないなら知らないでいいや。仕事の話は、ひとまず聞くな」

触れてはいけない話題だったかと、すぐに口を噤む。

（家業が思わしくなくて、出稼ぎにきたとか？ それか、農家の仕事がいやになって家を飛び出してきたとか……）

聞くなと言われたらこれ以上は聞けない。もしかして恵介は、現在無職なんだろうか。

理乃は無意識にうーんと腕組みをしていた。

「どーしたの理乃。難しい顔しちゃって」

「あ、いや」

選ばなければ、都会にはいくらでも仕事がある。故郷の旭川では周りの目もあるしもうもいかないだろうが、東京にいればバイト程度の仕事なら簡単に見つかる。

対して自分は、運良くとはいえ大手の一流企業に勤める身だ。リストラが今後ないとは限らないけれど、ひとまず福利厚生もしっかりしている。結婚しても仕事を続けている社員はたくさんいるし、理乃だっていつか結婚をしたとしても仕事は続けたいと漠然と考えていた。

早い話、恵介が仕事をしていなくても、見つけた仕事はバイト程度でも——今の理乃なら、養っていけるかもしれない。

「正直さ、寂しいよね。一人の生活って」

ぼつりとつぶやく。

「私もさー、本当運良くだけどそれなりにいい会社に勤めさせてもらってるし、なんかあっても……恵介一人くらいなら、なんとか養っていけるかな」

「え？ ちょい待てよ理乃、お前何言ってる……」

言いかけた目の前の友人の足を、隣の恵介が思いっきり蹴った気配がした。

「っ!!」

涙目で悶絶する向かい側の友人をちらりと見ながら、恵介はどこかで仕事に対して引け目を感じているのかな、などと思う。

恵介はジロリと友人を一瞥した後、身体ごと理乃の方へと向き直った。

「もしかして理乃、俺のこと養ってくれるのか？ それは心強いな」

「でも、何もしてないとかヤダよ。ヒモみたいじゃん。食費くらいは稼いでくれないと困るし、そうしてほしいなって思うけど」

「だいじょーぶだいじょーぶ」

にかつと歯を出して恵介が笑った。確かに、彼とだったらなんだか楽しい結婚生活が送れそうな気もする。

(結婚と恋愛は違うって、もしかしてこういう意味なのかも……)

チビチビとビールを飲みつつ、いつの間にか理乃の気持ちはすっかり結婚の二文字に支配されていた。坂下ではなく、恵介との。

「な、理乃。俺と結婚してみるか？」

ほんのり恵介の声が掠れているのは、アルコールのせいだろうか。試すような口ぶりなのに、なんだかフワフワと夢見心地になった。

いつもより酒が回っているためか、それとも十年ぶりの再会だからか、隣の恵介がやけに格好よく見える。ほんのり赤く潤んだ目がじっと理乃を見つめていて、その視線を誤解しそうになった。

結婚なんて、きつと冗談だ。恵介の中では、たとえ上京して一流企業のOLとして働いているようが多少垢抜けようが、理乃は高校時代と同じく「一番の女友達」のポジションから変わらないのだろう。

「そうだねー。しよっか、結婚!」

彼の冗談に乗ったつもりでとびっきりの笑顔でそう言ってみせたのに、いきなり恵介は顔を赤くして真顔になった。

「え、マジで？」

周囲の友人たちも理乃のノリに驚いたのか、瞬時にシンとなる。

ちよつと待て。

理乃だけが、一人で慌てた。

「え……って、ちよつと恵介! この流れなら当然そうなるでしょ!」

「ご、ごめん。大丈夫大丈夫」

恵介は軽く頭を振りつつ、大きな手で自分の額を押さえた。

一体なんだというのだ。こんなやりとりなら高校時代にも何度かしたことがあって、

『俺ら付き合ってみるかー?』

なんて恵介の方から言われたことも一度や二度ではない。そんなやりとりの延長の感覚だったのに、真面目な反応をされては焦<sup>あせ</sup>ってしまう。

(あ……でもその度に私は『絶対やだ!』とか言って否定してばかりだったかも)

となると、ふざけた冗談に乗っかっただけとはいえ肯定したのは初めてになる。しかしそれに気づいても、もう後にはひけない。

「ノリが悪いなあ、恵介。そこは冗談でもなんでもうまく乗っかってくれないと私の立場が……」

なんとか場を収めようと引き<sup>ひ</sup>つめた笑顔で続けた言葉は、いきなり遮<sup>せり</sup>られた。

パタパタと顔を扇いでいた左手を、恵介に力強く握られたことよって。

「よし。しよう。結婚」

「は……?」

ふざけてるだけだと思つたのに――

理乃の顔を覗き込んだ恵介の顔は、真剣そのものだった。すぐ近くで顔を見つめているからこそ、何を考えているかわかる。真剣な時に見せる表情は、高校の時からなら変わりがなかったからだ。

ごまかそうと思つていたのに、この言葉を流すことができなくなった。

(どうしよう、なんでこんな反応してくるわけ――!?)

頭が働かず硬直した身体で、理乃ができることといえば――

無言のまま、恵介の勢いに押されるようにこくんとうなづくことだけだった。

そして周りの友人たちも、どう反応していいのかわからない様子で自分たち二人を見守っている。

「え、何このムード? なんかつたの?」

結局なんともいえない微妙な空気は、トイレから戻った同級生の一言によって破られるまでそのままだった。

## 2

「んじゃ、今日はお疲れ〜!」

「また飲もうね! これからは、理乃ももつと参加してねー」

「うん、楽しかった。またね!」

その後は何事もなかったかのように話が流れていき、自然と飲み会が終了した。二次会に流れていくメンバーもいるようだが、恵介はどうやら行かないらしく理乃もなんと

なく断ってしまった。

さっきのあれは、酒の席での戯言ざれごとにしてしまえばいい。そうと決めたらそそくさと集団から抜けだし帰ってしまおう……と歩きかけたところで、強く腕を掴まれた。「どこ行くんだよ」

聞き慣れた声は、振り向くまでもなく誰のものかわかる。

全身を緊張させながら振り向くと、ムツとした表情の恵介が自分を捕まえていた。「どこ行くなって、おうちに帰ろうかなって。あんまり遅くなるとタクシー捕まえにくくなるし……って、わ！」

「じゃあ今日はありがとう。またな」

恵介はぐいっと理乃の腕を引っ張ったかと思うと、あつという間にガラガラと残っていた仲間内の輪を抜けだした。

抜けだした二人に気づいた誰かが、ヒュウツと口笛を吹く音が聞こえてきた。振り向くのが恥ずかしくて、慌てて引っ張られるがままに恵介の背中を追う。

「ちよつと待ってよ、恵介どこに行くの？」

「区役所」

「は？」

そのまま強引に理乃を引っ張り歩き続けた恵介は、しばらく進んで同級生たちから姿

が見えないくらいになり、ようやくぴたりと足を止めた。

「するんだろ？ 結婚。行くぞ区役所」

「あ、あれは……そのっ」

言葉のアヤだったと言ってしまった方がいいのに、何故かそう言うと言った恵介に軽蔑けいべつされそうな気がして言えなくなつた。軽はずみに口にした「結婚」という単語だけれど、やっぱり誰でもいいわけではない。

理乃の腕を掴んでいた恵介の手が離れ、すすつと下がって手を握ってきた。繋がれた手は、まだ肌寒い春の夜だというのにひどく熱い。するりと指が絡まったかと思つた。ぎゅつと力が入り、理乃の手を包み込む。

手を、繋いでいる。そう意識した瞬間に、記憶がフラッシュバックのようによぎつた。

「ほら、行くぞ」

一瞬怯んだ理乃の手をしっかりと握り直すと、恵介は再び歩き始めた。皆から遠ざかるうとしていたさつきより歩くスピードは落ちて、理乃のペースに合わせてくれている。その行動も、あの頃と同じだ。

——ねえ、恵介。アンタはあの夜のこと、覚えてるの？

高校時代の記憶よりもずっと広い背中と、がっしりとした肩。充分に知っているはずの彼女の、目の前にいる男はどこか違う。



振りほどきたくても、この指をほどけない。それができないのは、彼との昔の思い出がよぎってしまったからなのか――

理乃は黙って下を向くと、繋いでいない方の手で胸をぎゅっと押さえながら恵介にういていった。

盛り上がってしまった気持ちを一気に冷ましてくれたのは、眠そうな顔をした区役所の夜間窓口の職員だった。

「婚姻届ならあることはあるけど……おたくら、本籍はどこ？」

「本籍？ 本籍は北海道の……」

「だったら戸籍謄本とかあるのかい？」

きよとんとしている理乃の横で、恵介があー、と低い呻き声を上げた。

「そっか……そりゃ、当然だよな。印鑑とかもいるし」

アルコール臭をブンブンと漂わせた明らかに酔っ払いの二人に、職員は笑いながら婚姻届を手渡ししてきた。

「勢いで婚姻届を出したくなった気持ちもわからんでもないけどねえ、本籍がここじゃないなら戸籍謄本が必要になるからね。あとそれぞれ証人欄あるから、そこも記載してもらわないといけないしな」

渡された婚姻届を覗き込むと、確かに証人欄がある。双方の証人からここに記入と捺印をしてもらわないといけないようだ。

どう見ても、恵介と理乃は酔った勢いで結婚しようと盛り上がりすぎたバカッパルだ。いたたまれなくて顔を真っ赤にしながら下を向く。

職員に生ぬるい笑みとともに見送られながらそそくさとその場を離れると、二人はマジマジと手元の婚姻届を見つめた。

「ねえ恵介……戸籍謄本って、どうやって手に入れるんだっけ？」

「戸籍があるところの市役所あてに、なんか書類送るんだよ」

「市役所あてって……旭川の!？」

「そうそう。確か、為替を買って同封して」

それなら、どう見積もっても数日はかかる。肩の力が一気に抜けた。

「勢いで簡単に結婚なんてできないってことだね」

「まあ……そういうことだね」

ほっとしたような、がっかりしたような、複雑な気持ちが渦巻く。それを振り払うように、理乃はわざと明るく恵介に話しかけた。

「どっかの外国の歌姫がさー、酔った勢いで結婚したことかあったよね！ やっぱあれって海外ならではなんだね」

恵介の手から婚姻届を奪うと、ひらひらとなびかせる。

「そうかもしれないけど」

「うん。やっぱり日本はいい国だわ。治安がしっかりしてるし」

何を言ってるんだと自分でも思いつつ、沈黙が怖くて余計なことを話し続ける。心のどこかにショックにも似た気持ちがあるのは、わかっていた。

恵介は、酔った勢いで理乃に結婚しようと言っただけだ。それも、坂下との出来事を愚痴ったのを、気にしてくれているんだ。ほんやりとはいえ結婚したいと口にした理乃の願いを、叶えてくれようとして。そういう優しいやつだっというのは、きつと理乃が一番わかっている。

距離感がわからずに苦しかった高校時代とは違って、今なら痛さをやり過ぎず方法を知っている。あの頃より成長して、それなりに恋愛経験は積んできたのだ。

期待しすぎないことには、慣れている。

「じゃ、帰ろうか……って、恵介今どこに泊まってるの？」

「あ、しばらくはホテル住まい」

くるりと恵介の方を振り返り、向かいから歩いてくる人物に気づいて理乃は固まった。理乃の視線の先に気づいた恵介が、怪訝そうにうしろを振り返る。

「あれ？ 前島さん？」

間違いない。ぎくりと身体がこわばった。

そこにいたのは、仲睦まじく身体を寄せ合い腕を組んだ二人——坂下と、結婚相手の真田の姿だった。

「こんばんは、どうしたのこんなところで」

理乃の傍に立つ恵介に若干惑うような視線を投げながら、坂下が声をかけてきた。お互い相手がいるにもかかわらず、何の躊躇もなく声をかけられるというのは——自分を、なんとも思っていない証拠だ。それがわかって、忘れていたショックが蘇る。

「前島さんですね。こんばんは」

坂下の隣にいた真田が、にっこりと微笑んだ。深夜にもかかわらず、鈴のように朗らかな声。なんのうしろ暗いところもない爽やかな笑顔に、理乃は何故だか打ちのめされた。「こんばんは！ こんな時間に奇遇ですね！」

一人じゃなくてよかった——そんな自分のみっともないプライドに嫌気がさしつつも、理乃はほんの少し恵介へと身を寄せながらにっこり笑った。先ほど勢いで繋いだ手は、運良くそのままだ。じわりと手の平に汗が滲み、無意識に力が入った。

坂下の視線が理乃と恵介が繋いでいる手に注がれる。彼の表情が微妙に変化したのは気のせいだろうか。

恵介はなんとなく事情を察したのか、微妙な表情を浮かべている。堂々と挨拶をする

ことは躊躇ためらわれたのか、無言のまま二人に軽く会釈せうやくをした。

そのまま、何事もなかったように通り過ぎてくれたらよかったのに。

坂下と腕を組んでいた彼女は興味深げに、そして無遠慮に、しげしげと恵介の顔を眺めた。

「前島さん、この方は？」

「は？」

そんな質問を、坂下ではなく清楚せいそで大人しそうな彼女から投げかけられるとは思ってもしなかった。

(なんで部署も違う、ほぼ初対面のアンタに、私の交友関係を話さなきゃいけないの!?)

しかし酔っているとはいええ、こっちの心情をそのままぶちまけるなんて大人げない。

「ええっと……」

頬を引き曇曇らせつつ、ここは多少カッコ悪いが無難ぶなんに「友達です」と言っておこうか——そう考えを巡らせていたところで、彼女はめざとく理乃が手に持っていたものに視線を走らせた。

「あら、それって……婚姻届じゃないですか？」

「え」

広げた状態で手に持っていたことを、すっかり忘れていた。慌あわててうしろに隠しても、もう遅い。

「やっぱり！ ほら、私たちも手に入れたばかりだからわかるんですよ。それ、間違いないですよね」

「ええと、その」

坂下が、目を瞠みはって理乃を見つめている。

「……結婚するの？ 前島さん」

その言葉に、わずかな含みがあるように感じた。

(マズイ、どうやってごまかせば……)

「あ、もしかしてー。前島さんが結婚するわけじゃなくて、誰かに頼まれたとかですか？」  
屈託くつたくのない真田の笑顔が、理乃の目には大層わざとらしく映った。

人に頼まれたからってこんな夜中に区役所に婚姻届を取りにくるわけがあるか。理乃が結婚などするわけないとバカにされたような気がして、頭にカッと血が上る。でも、こんなことで顔色を変化させているなんて知られたくない。今が暗い夜でつくづくよかった。

一刻も早く二人の前から消えてしまおう。理乃は、なんとかごまかしてこの場から立ち去ることしか頭になくなっていた。

(もう、なんでもいいからここからすぐに消える理由があれば……)

その時。理乃の肩に力強い腕が回り、ぐいっと身体を引き寄せられた。

「恵介?」

「理乃。会社の人?」

向けられているのは、とびつきり甘い顔だ。今度は別の意味で顔が火照る。

「う、うん……そうだけど」

「じゃあどうせわかるんだし、ちゃんとやっておいた方がいいんじゃない? 俺たち、結婚するんです」

「けっ、けっ……!」

思わず声を上げそうになったけれど、肩に回されていた手にぐっと力が入ったことによつて寸前で堪えた。

「えー! うそー! 本当ですか前島さん! それならこの間、私たちが挨拶をしていた時に一緒に言つてくださればよかつたのに」

真田がきゃあつとはしゃいだ声を上げた。

これは、天然なのか計算なのか。誰が、人の結婚話に便乗してそんなことを報告するもんか、とフツフツと怒りが湧いてくる。

酔つた勢いで数時間前に結婚を決めたことは、キレイさっぱり頭から消えていた。理

乃はにっこりと目の前の二人に微笑みかけた。

「……じゃあ、お邪魔だからもう行こう、恵介」

「そうだね。それじゃあ失礼します」

理乃は強引に恵介の手を引き方向転換すると、二人からの言葉を聞く前にその場を後にしていた。

ずんずんと歩き続ける理乃に、恵介も無言でついてくる。五分ほど歩き続けてチラリとうしろを振り返り、坂下と真田の姿がまったく見えなくなったところでようやく立ち止まった。

そして、きつと恵介を見上げる。

「どうして……どうしていきなりあんなこと言ったの!」

恵介は、会社の人かと確認した上で「結婚する」と言い切った。突然の二人の出現で動揺していた理乃とは対照的に、恵介は平常心だったはずだ。恵介に助けられたことはわかっている、この事態を受け入れられなくて怒りが湧いてくる。

「だってあいつら、さっきまでお前が愚痴ってた二人だろ」

「ど、どうしてわかるのよ」

「バーカ。顔見てりゃわかるんだよ」

本日何度目かわからないデコピンが飛んできそうになり、理乃は慌てて頭を引いて恵

介から逃げた。

「……否定したつてどうせ無駄なんでしょ。そうだけど、そうだけどき。だからつて！」  
 パニックを起こしそうだった。恵介の顔を見れば、からかおうとかふざけようとして  
 言ったんじゃないことくらいわかっている。間違はなく、自分を氣遣つてああしてくれ  
 たのだ。

(でも、だからつてそんな簡単に……)

社内には理乃が結婚するという噂が流れてしまったら、それを否定する方がずっと辛い。  
 私のが好きで結婚しようと思ってるわけじゃないくせに、ただの同情のくせに、  
 そもそも本当に結婚する気なんてなくせに――

なんて言つていいのかわからなくなった理乃は、いまだ自分が恵介の手を握り続けて  
 いることに氣づいてぱつと手を振りほどいた。

理乃にできることといえは、一つしかない。

「帰る！」

くると恵介に背を向けると、一目散に走りだした。

「え、ちょ、オイ理乃！」

走りだした方向に何があるのかはわからない。けれど、今はこうするしかできなかった。

### 3

酔っ払った状態がむしやりに走ったせいか、それとも単なる飲み過ぎか。翌日はひ  
 どい二日酔いで目覚めた。週末だったことがせめてもの救いだ。何も考えたくないとは  
 かりに眠り続ければあつという間に夕方でも、そもそもと起き上がつて食事を済ませてま  
 たベッドに潜り込む。

(睡眠つて、なんて簡単に氣持ちのいい現実逃避なんだろう)

ベッドの中でひたすら惰眠を貪つた結果、貴重な休みはあつという間に終わつてしま  
 い、氣づけば月曜日を迎えていた。

(あー……なんか氣が重い)

ただでさえ憂鬱な月曜日に加え、金曜の夜にあったことを思うと頭痛がしてくる。加  
 えて、連絡先は交換していたにもかかわらず恵介からまったく連絡が来ていないのも氣  
 になっていた。

「結婚しよう」と言い合つて婚姻届まで取りに行った仲なのに、実際には付き合つてす  
 らいない。なんだか滑稽な話だ。

「おはようございまーす……」

気の抜けた挨拶をしながら受付を通りぬけ、所属するECM第一課へと向かう。フロアに足を踏み入れると、先週結婚の報告をしていた時と同じく坂下と真田が上司のデスクにいて何やら話をしていた。げ、と小声でつぶやくと、理乃はなるべく目立たないように、そして二人には興味のないフリをしてデスクについた。

何食わぬ顔で仕事の準備をした後、トイレにでも行って一旦ここから退散しよう。そう思っていたのに、さり気なく立ち上がったところで声をかけられてしまった。

「お、前島さん来てたのか。おはよう！」

よりによって、声をかけてきたのは担当課長の佐々木だ。普段なら挨拶すらされずに素通りされることがほとんどなのに、よくない予感がする。それでも無視をするわけにはいかず、理乃はにっこり笑みを返した。

「佐々木課長、おはようございます」

課長の隣に並んでいる二人は、幸せそうに微笑んでいる。それを羨ましいと思う感情はとっくに消えていて、むしろ自分のことはほっといてくれと願う。しかし理乃のそんなささやかな願いは、見事に覆された。

「前島さんはいくつだったっけ？ もう三十になったんだったかな」

担当課長の無神経な発言に、ぴくりと理乃の眉が上がった。アラサー女子の地雷を、

なんの気なしに踏みやがった。

「いえ、残念ながらまだあと二年ほどありますが」

「まあ、大して変わらないな」

変わるんだよこのどアホ！ と心の中でどつく。

「うちの第一課の有望株坂下くんも、いよいよ結婚だとき。前島さんはどうだい？」

世間話をしたくて理乃に声をかけてきたのだとしたら、明らかに人選ミスだ。いつもより早く出社してしまったことを、これほど後悔したことはない。同じ部署にも理乃と同世代やそれより上で、結婚していない女性など山ほどいるというのに——今日に限って、そんな同僚たちはまだ誰も出社していなかった。

これも立派なセクハラのひとつなのに、悲しいかな、元派遣社員の事なかれ主義が顔を出し、つい愛想笑いを浮かべてしまう。

「そうですねー……」

相手がいれば、と無難な返事でもかかそうと思っていたところで、部長のすぐ横にいた真田が意味ありげにククツと口の端を釣り上げて笑った。およそお嬢様とは似つかわしくない態度に、理乃が怯んだ次の瞬間——

「えー、でも前島さんも、ご結婚されるんですよねー？」

朗らかな真田の声が、フロアに響いた。コイツやっぱ計算ずくでやってるな、と内

心舌打ちしたのは言うまでもない。

どうせなら笑って流してください皆様——そう願っても虚しく、それどころか真田の発言と同時に同世代の同僚たちがフロアに足を踏み入れていた。最悪のタイミング、と天を仰ぎたいところをなんとか堪える。

「えっ……理乃、結婚ってなんの話？」

同じアシスタント業務につき一緒に行動することが多い彼女たちは、思い切り目を丸くして理乃を見つめている。今までそんな話はまったく出ていなかったのだから、その反応も当然だ。

「えっと、その……」

「あれー、前島さん。まだ皆さんには話されていないんですか？」

「……ちよつと理乃、なんでその女と親しげにしてるわけ？」

同僚の中でも一番親しくてデスクもすぐうしろの涼子が、コソツと理乃にささやく。これにはちよつとしたわけが、と小声でもにもによい訳をしようとしていると、真田はどこか嬉しそうに再び口を開いた。

「私たち、金曜日の夜に前島さんが男性と一緒にいるところにはったり会っちゃったんです。ね？ 坂下さん」

「あ？ ああ……」

隣に立っていた坂下が、真田に話しかけられて上の空で返事をした。探るような視線を理乃に向けてくるが、こっちはそれぞれではない。

（この女……それ以上余計なこと言わないでよ！）

睨みつけたくなった次の瞬間——

「婚姻届、持っていらっしゃいましたよね？」

ここで椅子を投げつけずに平静を保っていた自分を、褒めてやりたい。

「はあー……!？」

一気に同僚たちに囲まれ、理乃は今度こそ天を仰いだ。

「ちよつと待って皆。あの、説明するから……」

ただならぬ雰囲気、同じフロアの皆は何事かと理乃たちの方へと視線を投げてくる。もうイヤだとげつそりしかけたところで、ようやく始業を知らせるベルが鳴った。

「ま、それじゃあ今日も一日頑張ってくださいね！」

大事になっては面倒だと思っただのか、火種を撒いた張本人の課長はそう言ってパンパンと手を叩いた。それを合図に坂下と真田は課長のもとを離れ、同僚たちも皆、納得のいかない顔をしつつそれぞれデスクに戻っていった。

（た、助かった……）

理乃に話しかけて余計な事態を招いたのも、無理やり収束したのも同じ人物というの